特集　東日本大震災から１０年

東北の未来と復興を考える。

2011年3月11日、東日本大震災が発生。震源に近かった岩手・宮城・福島の3県は、特に大きな被害を受けた。震災から10年。今の「東北」の声に耳を傾けてみよう。

「震災風化させない」

東北と共に走り続ける三陸鉄道

2011年3月11日、東日本大震災が被災地の人々の暮らしを壊していった。鉄道や道路などの交通インフラもその例外ではなかった。三陸鉄道は、大津波によって鉄路や駅舎に大きな被害を受けた。

1984年4月の北リアス線、南リアス線の開業以来、三陸鉄道は、岩手県の三陸沿岸を走り続けてきた。1日約5000人（2019）が利用する三陸鉄道は、地域住民にとって欠かせない存在だ。2013年にはNHK連続テレビ小説「あまちゃん」のロケ地として使われるなど、観光地としても人気だ。

2019年3月23日、山田線の宮古―釜石間が、JR東日本から三陸鉄道に移管され、三陸鉄道リアス線（盛―釜石―宮古―久慈）の走行距離が163キロメートルとなり、第三セクター鉄道では日本一長い路線となった。その駅の数41箇所にのぼる。

三陸鉄道では、岩手県沿岸を縦断する線路を活かしたさまざまな企画列車が走る。「あまちゃん」で話題になったお座敷列車の他に、リアス海岸の海を望みながら、三陸の美味しい海の幸が楽しめるイベント列車もある。これらの企画列車は旅客営業部がアイデアを出し、社員の意見を踏まえた上で決定に至る。

三陸鉄道は、東日本大震災の大津波による甚大な被害から、たった3年で、南リアス線、北リアス線共に全線復旧を遂げた。2012年には久慈―田野畑間が復旧開通したことで、こたつ列車が再開し、震災学習列車の運行も始まった。三陸鉄道の担当者は「震災の経験を多くの人に知ってもらい、今後の災害対応に少しでも役立ててもらうために始めました。企業、大学、自治体などの研修としても活用されています。特に、2020年は、新型コロナウイルスの影響で、県外に修学旅行へ行けない岩手県内の学校団体に利用していただきました」と話す。

2019年の三陸鉄道リアス線の開通に伴い、さらにたくさんの乗客が全国各地から訪れたが、同年10月の台風19号の影響で、全長163キロメートルのうちの約7割が不通となった。「2020年度は震災前と比べても回復したとは言えない状況でしたが、全線の乗客数が、前年比で倍増しました。2020年3月にリアス線が全線復旧しましたが、今度は新型コロナウイルスの影響で、お客様が減っています」と三陸鉄道の復旧の難しさを語る。

被災による人口減、内陸などへの転出による沿線人口の減少に加え、新型コロナウイルスの影響もあり、厳しい状況は続く。

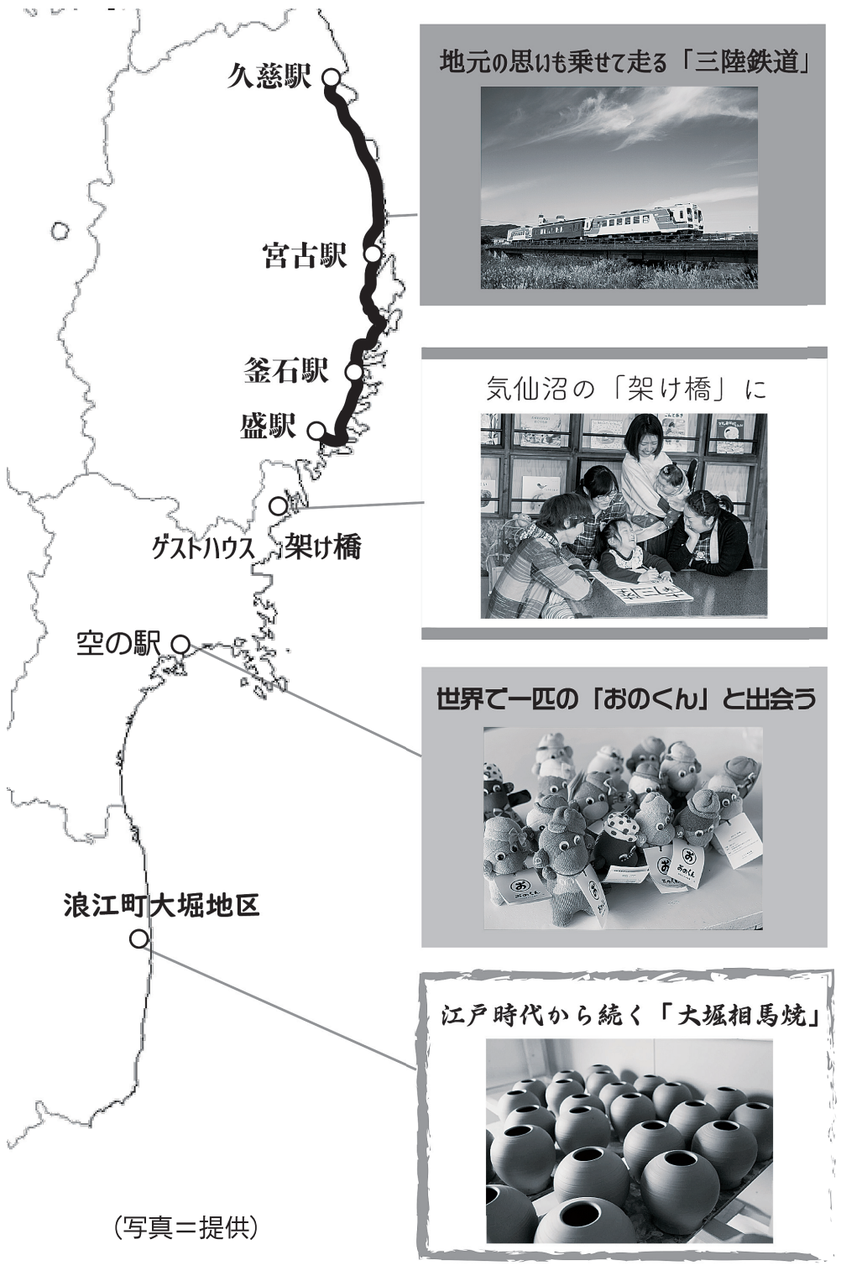
最後に、ローカル鉄道と観光スポットという二つの役割を併せ持つ三陸鉄道の可能性について尋ねた。「新型コロナウイルスの影響で県外へ修学旅行に行けない県内の生徒さんが震災学習列車に乗って学んでいただく機会がありました。今後も震災を風化させないという役割を果たしながら、地域に密着した鉄道として、岩手だけではなく東北を盛り上げていきたいです」

新型コロナウイルスの感染拡大が収束したら、東北を訪れてみてはいかがだろうか。こたつ列車で、美味しい海の幸を楽しみながら、東北の未来に思いを馳せる。三陸沿岸で、そんな素敵な旅があなたを待っている。

（小島毬）

白井海岸駅ー堀内駅間を走る三陸鉄道

（写真＝提供）



（写真＝提供）

気仙沼・ゲストハウス「架け橋」

7年目の春を迎える

ゲストハウス「架け橋」は宮城県気仙沼市にある。NPO法人「Cloud JAPAN」代表理事の田中惇敏さんが、2014年に開いた。昼は親子や地域の人が集う、絵本カフェ。夜は地元の人と気仙沼を訪れた人が交流する場となる。ここでは現在5人が大学生スタッフとして働く。田中惇敏さんと大学生スタッフの藤岡愛理さんと田中慧さんに話を聞いた。

田中惇敏さんは東日本大震災の1カ月後、2011年4月に九州大学に入学した。当時、震災は社会全体の大きな動きだった。大学の授業でも、ニュースでも、震災についての話が出てくる。田中惇敏さんも、当たり前のように震災に関心を持った。そして、ボランティアとして東北の被災地に向かうようになる。当初は東京を拠点に、日帰りで瓦礫の撤去作業などをしていた。しかし、福岡から東北の被災地に行くためには多額の交通費がかかる。そこで、長期のボランティア活動を探し始めた。産業や子どもと遊ぶお手伝いなど信頼関係が必要とされる活動を見つけ、取り組むようになった。

被災地には、学生ボランティアが安く宿泊できる場所がなかった。田中惇敏さんも地元団体の事務所に泊まりながら、活動していた。その流れで、空き家を貸してもらい、ゲストハウスをつくることに。「自分が休学すれば、その後の社会に与える影響はかなり大きいはず」。2014年に、大学の休学を決断した。

学生スタッフの藤岡愛理さんは昨年4月から、田中慧さんは昨年10月から「架け橋」で働いている。

藤岡さんは働き始める以前から、月に一度、お客さんとして「架け橋」に通っていた。大学を休学するかどうか悩んでいた時、背中を押してくれたのが「架け橋」の人たちだった。「信頼できる人のそばにいたいと思い、スタッフになった。気仙沼に来てから自分を見つめなおすことができた」と話す。

田中慧さんも、「架け橋」のリピーターの一人だった。昨年、新型コロナウイルスの影響で予定していた世界一周の旅に出られなくなってしまった。自分を見失った時、相談に乗ってもらったのが田中惇敏さん。「架け橋」について、「自分を吐き出せる、居心地のいい場所。もっと多くの人に来てもらいたい」と語る。

今、被災地では新しい高速道路や施設が急ピッチで建てられている。しかし、福島県南相馬市の出身の藤岡さんは、震災から10年が経ち、復旧は進んだが、復興はしていないという。「被災した全ての人が、心の中にある、もやもやしたものを言葉にできていないままだ。被災した人それぞれが抱えているものは違う」と話す。

被災地には、震災後、多くの熱い思いを持った優秀な人材が、各地から集まっている。「被災地発」と呼ばれる社会課題を解決する手段が、少しずつ全国に広がりつつある。田中惇敏さんは、あと10年あれば、東北の被災地が、地方のリーダーになれると考えている。これが、いろいろな人たちから応援を受け、被災地で活動しているNPOの使命だ。「今後は全国の人たちに恩返しができるよう、みんなで社会課題の解決方法をつくっていきたい」と語る。

ゲストハウス「架け橋」では、感染対策をとりながら、卒業旅行に来てもらえるよう、ツアーを企画している。建物が小さいため、友人同士で「架け橋」を貸切ることができるという。藤岡愛理さんは、「今年卒業する人たちに、気仙沼でのツアーを届けたいと思っています。ぜひ皆さん、遊びに来てください」と話す。

（篠原佳鈴）

「架け橋」ではスタッフが温かく迎えてくれる

（写真＝提供）

紡ぐ伝統「大堀相馬焼」

震災から約10年、新たな転機

300年以上の歴史を持つ大堀相馬焼は、福島県浪江町大堀地区を中心に発展してきた伝統的工芸品である。特徴は、大きく三つある。一つ目は二つの湯飲みの口元が一つにまとめられる二重焼きという構造だ。熱い飲み物も持ちやすいという利便性だけでなく、職人がろくろで一つ一つ丁寧に手作りしているという温もりも感じることができる。二つ目は貫入という、焼いた直後には弾んだ音を楽しむこともできる青ひびだ。そして三つ目は器に描かれる、左向きの馬の絵だ。これは「右に出る者がいない」という縁起の良い意味合いが込められている。鎌倉開府前から続く、馬を素手で捕らえて神前に奉納する神事「野馬懸」が由来とされている。1000年以上地元、相馬地方の人々に楽しまれる相馬野馬追の神髄だ。

そんな由緒のある地域で人々から愛され続ける大堀相馬焼の伝統が、職人の高齢化に伴う後継者不足によって、深刻な危機に直面している。元々問題視されていた後継者不足に、追い打ちをかけたのは東日本大震災と福島第一原発事故だった。それまで大堀地区に23以上あった窯元が現在は別々の土地に移り、9窯に減少。震災から10年がたった今も大堀地区は帰還困難区域とされており、元の窯があった大堀地区での生産は、いまだかなわない。

大堀相馬焼の技術を受け継ぎ、次の世代につなげていきたいという、後継者不足への対策として、3年間という定められた期間で地域に貢献するよう発足した地域おこし協力隊。その職人枠に初めて就いたのが吉田直弘さん（26歳）。吉田さんが地域おこし協力隊として福島に移住することを決めたきっかけは、大学3年次に参加した大堀相馬焼のインターンシップだった。京都美術工芸大学で、工芸コースを選択していた吉田さんは、大堀相馬焼作りを体験した際に純粋にものづくりの面白さを感じたという。また、自身が大学で学んできた知識が存分に活かせることや、ある陶芸教室の先生の「面白いことを見つけなさい」という言葉が、吉田さんの背中を押した。

吉田さんは、今年で地域おこし協力隊としての任務を終了し、来春からろくろ職人として独立する。この3年間の成長ぶりを問うと、ものづくりに対する考え方が大きく変わったと話す。「当初は、自分の好きな工芸に携わり、自分の好きな作品を作れればそれでいいと思っていました。でも、この地で多くの人と触れ合いながら過ごすにつれて、自分がすべきことはものづくりに留まらず、地域づくりなのではないかと感じ始めました。作品を作ることに加え、それを途絶えさせない環境づくりの大切さにも気づきました」と語る。「地域をつくって人もつくる」これが今の吉田さんの指針だ。皆が同じ目標を持って協力することも伝統の継承、地域の復興には欠かせない。地域おこし協力隊の任務期間が終わっても、福島に残り大堀相馬焼を作り続けると決意した吉田さんを支えるのは、地元の人の感謝の言葉と笑顔だ。

秒針が止まったままの時計。棚から崩れ落ちた多くの陶器。あの悲劇は決して薄れない。苦難を経験した地域で受け継がれてきた大堀相馬焼という伝統は、これからも多くの人の愛によって紡がれていく。吉田さんをはじめ、次世代へと継承されることで、伝統に新しさが交わる。大堀相馬焼の伝統が、今、希望に満ちた変化を遂げようとしている。

（古嶋凜子）

インタビューに答えてくれた
吉田直弘さん

松永窯の大堀相馬焼

（写真＝提供）

東松島との縁つなげ

ソックモンキー　おのくん

東日本大震災で被災した宮城県東松島市で誕生したソックモンキー「おのくん」。東松島の復興を願い、「東松島を知ってほしい。東松島に来てみてほしい」という思いから生まれた。今も、東松島の主婦らを中心とした「お母さん」たちが、毎日、手作りしている。

2011年5月、80世帯約400人が住む小野駅前応急仮設住宅では、新たなコミュニティ形成が課題だった。2012年4月20日、20畳ほどの集会場で、「めんどくしぇ」とぼやきながら、お母さんたちがソックモンキーを作り始めた。現在の活動拠点は、2015年5月に陸前小野駅前に建てられた「空の駅」。日々、お母さんたちが、おのくんに命を吹き込み続けた結果、おのくんの輪は、全国へと広がっていった。

おのくんは、サイズ、色などに関係なく1000縁で里親さんの元へ旅立つ。おのくんのプロジェクトの共同代表を務める新城隼さんは「おのくんは、販売ではありません。東松島との縁をつなぎ、また里帰りしてほしい。通貨の単位の円ではなく、縁という表記を意識的に用いています」と語る。

おのくんの掲げるテーマを象徴的に表すのが、環境・感教・間協という「三つのかんきょう活動」だ。一つ目は、東日本大震災で失われた自然環境や生活環境にもう一度目を向け、0から作り直す環境活動。二つ目が、一緒に感動する体験をするという意味の感教。これまで挑戦したことがないことをやってみるといろんな感情が動くのではないかという思いから、里親さんたちのアイデアも取り入れながら、朗読会やワークショップを開催する。三つ目は、○○間協力という意味での間協。里親さんの協力のもと、様々なプロジェクトを成功させてきた。過去には、おのくんのデザインのタンブラーを作ることで、おのくんの着ぐるみをつくるプロジェクトを成功させた。その時に生まれた着ぐるみは「でっかいおのくん」として、各種イベントで人気を博している。

年間2～3万人が、東松島に里帰りしていたが、コロナ禍で10分の1から20分の1程度になった。毎年5月に開催され、全国各地から約2000人の里親さんが集う「めんどくしぇ祭」や松島基地航空祭の中止により、東松島に訪れる観光客の数が激減した。全国各地でのイベントが全て中止となった2020年は、我慢の1年だった。

2021年は、里親さんたちとのつながりを大事にしながら、新プロジェクトに挑戦する。「何か世の中のためにできることはないかと思って、おのくんの消毒液用のPOP（除菌POP）の無料配布をインターネット上で始めました。除菌POPをきっかけに、様々な活動に取り組む中で、新たなコミュニティの必要性を感じます。全国各地、そして世界中への助け合いの輪を作ろうというのが今の目標です」と新城さんは語る。

世界中の人たちに知ってもらえるキャラクターに。共同代表の新城さんと武田文子さん、そして、おのくんのお母さんたちと心を一つに、おのくんの挑戦は続く。東松島の「空の駅」で、世界に一匹だけのおのくんと出会える日が待ち遠しい。

（塚原千智）

おのくんの除菌POP

（写真＝提供）